

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

キリスト教と文化研究センター主催講演会（概要）

「東アジアの平和

—『安保法制』以降の日・中・韓関係の課題と展望」

講師 李 鍾元 早稲田大学アジア太平洋研究科教授



去る二〇一五年十一月七日、関西学院会館光の間にて、「東アジアの平和—『安保法制』以降の日・中・韓関係の課題と展望」を主題にRCC秋期講演会が開催されました。講師は李 鍾元 (LEE Jong Won) 氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）、参加者は一五〇名でした。以下は講演を短くまとめた概要です。

■東アジア・パラドックスと東アジアの現状

今日のテーマである日・中・

韓で考えると、日中韓の相互依存は相当に進んでいます。経済、社会を見ると、ほとんど一つの社会のように、どんどん接近しています。他方では軍備競争、軍拡がより深刻化する可能性もあります。中国は近年、二桁の軍備拡張を行っています。日本でも『安保法制』をきっかけに、軍備拡張論が出ています。この二つの流れが、国境を越えて、それぞれの国で渦巻きながらせめぎ合っています。東アジアは今、推移しています。東アジア・パラドックスという言葉は、韓国のパク・クネ大統領が使った言葉です。東アジアは社会、経済ではほとんど一体化しており、協調することで得るものが非常に多いのです。しかし、政治、外交、安全保障の分野では、

消耗戦をしています。このパラドックスをいかに乗り越えるかが大きな課題です。地域が一つになっていることを示す指標として、域内貿易依存度があります。域内貿易依存度は、地域の統合を測る一番わかりやすい尺度です。データを見ると、EU（欧州連合）が六五・七パーセント、七割ぐらいが域内です。それに対して、東アジア、外務省の定義では東アジアはASEAN（東南アジア諸国連合）+三ということで、ASEANと日・中・韓です。それが大体五六パーセントです。NAFTA（北米自由貿易協定）の域内貿易依存度が四三・五%ですので、東アジアはNAFTAより高いのです。NAFTAとは、アメリカ、カナダ、メキシコ、北アメリカ自由貿易協定です。東アジアはNAFTAより上で、EUに近づくようなレベルです。東アジアは、外交関係の争い、歴史認識の問題がありながら、経済ではNAFTAより統合度を深めているとい

うことです。政治、外交的で喧嘩をしても、社会、経済的には離れられない関係であることを、この数字が示しています。

■二〇一〇年度以降の変容と「安保法制」

日本の外交を振り返って考えると、九〇年代、二〇〇〇年代の中頃まで、東アジア地域の様々な枠組みを作り上げていく過程で、日本は大きな役割を果たしました。APEC（アジア太平洋経済協力会議）を作るときも、リーダーシップはオーストラリアがとりましたが、日本と二人三脚でした。日本は平和憲法がありますので、軍事分野では貢献できないが、非軍事で、多国間での枠組み作りに努力しました。日本では東アジア共同体という、鳩山総理の個人的なプロジェクトのように誤解されていますが、東アジア共同体の構想は、ASEAN+3で国際的に合意された長期的な目標です。その後二〇一〇年代になると、



リテイなどと呼んでいきます。これら四つの国が、合同演習をしたり、軍事技術の協力をしたりする

ことが、新聞を注意深く読むと、ここ数年継続的に行われています。日本とオーストラリアは、日本の防衛当局などでは事実上ある種の準同盟扱いです。日米に続いて、日米豪をアジアのNATO（北大西洋条約機構）にしようという議論が数年続いています。「安保法制」はその流れの中の一つだと思います。集団的自衛権は、自国が攻撃されなくても、同盟国のために戦うことです。政府の説明では、主にアメリカが攻撃されたときに一緒に戦うとされていますが、必ずしもアメリカに限らず、先ほど申し上げましたオーストラリアとの軍事協力というのも出ています。あるいは今大国ではないけれども、ベトナムとフィリピンにも軍事援助、警備艇などをODAで送っていますので、対象になる可能性があります。今年の五月には、フィリピンと合同演習を南シナ海で行っています。東アジアからは、日本が平和憲法の中で放棄したものを取り戻そ

うとしているように見えます。安倍外交は、全般的に見ると、東アジアの共同体を作る動きからは、だいぶ後退しているという印象です。

■ナシヨナリズムと日・中・韓の交流

現在、日・中・韓の間に、ナシヨナリズムがグラスルート（草の根）のレベルから、高まる兆候があります。世界でも一番、日・中・韓は、ナシヨナリズムの対立が起きやすい構図が有ると思います。二〇〇〇年代以降、ナシヨナリズムの高まりの要因は、政治学的にみると三つあると思います。第一番目は、パワー・トランジションです。中国の台頭、日・中の経済力の逆転、日本とアジア各国の大きな力の差がなくなっていることです。これは一世紀単位の変化です。不安定な変動期です。個人もそうですが、力関係、地政学的な力関係が変動するときには、一番意識が不安定になる時期です。強くなる中国は大国ナ

シヨナリズムが生じます。朝鮮半島でも統一ナシヨナリズムがくすぶっています。日本は、これまでは日本が上だった、地位の逆転に反発するナシヨナリズムが登場します。第二番目は、民主化です。世論とか一般市民の考え方がより政治に影響するという意味での民主化です。以前は権力で抑えていた様々な問題が、民主化で噴出し始めるのが、九〇年代以降です。民主主義は、ある意味で非常に不安定なシステムです。多様な意見が出ますので、外交が非常に難しくなるのです。東アジアは不幸なことに、まだ市民社会自体がナシヨナリズムの虜になる傾向があるので、第三番目は、グローバル化です。グローバル化は、国境が無くなります。グローバル化は新自由主義と結合してきますので、格差が生じます。自由市場原理、自由競争の時代がグローバル化の時代です。日・中・韓ともに格差が最大の問題です。今、特に若者の格差が最大の問題です。勝ち

組、負け組はつきり分かれていきます。負け組の不安がナシヨナリズムに結び付くわけです。また以前は、国境が守られてきました。物理的な国境が無くなると、不安になるのです。国境がなくなる状況で、例えば、中国人のアイデンティティをまとめるのは、愛国心になります。日本も同じ時期、二〇〇〇年代から愛国心を強調するようになりました。最後に、最近見て感銘を受けた数字が一つあります。ヨーロッパ統合の軸はドイツとフランスでした。ドイツ、フランスの和解促進の軸になったのが、エリゼ条約です。一九六三年に結ばれた独仏協力条約です。条約に基づき、独仏の協力事業の中で一番成功したと言われているのが、青少年交流です。青少年というのは一三歳から三〇歳までの働く青少年、学生も含まれています。二〇一三年が、条約締結からちょうど五〇年でしたので、報告書が出ました。報告書によると、五〇年間の青少年交流

に参加した総数が八〇〇万人でした。交流の中心は、相手の国に一定期間住み、勉強するプログラムです。五〇年間で八〇〇万人の参加者があつたということは、一年に換算すると一六万人になります。一年で一六万人が、相手の国に一定期間居住したということです。参加者の多くは現在、独仏の指導層は勿論のこと、国民の主要な部分を占めています。人口比でいうと、ドイツとフランスの人口を合わせると、だいたい一億五千万人ぐらいです。日本と韓国を合わせると、

と、だいたい一億七千万人ぐらいでしょうか。日・韓の間で年に一六万人がお互いに交流をすると、日・韓、東アジアの風景もだいぶ変わるだろうと思います。さらに、日・韓で考えると、日・中・韓の人口を合わせると一五億人ぐらゐになります。そうすると、日・中・韓の間では年間一六〇万人の青少年交流をした方がよいわけです。日・中・韓の政府が一六〇万人の交流を目指すと、東アジアの平和の実現は大きく進むと思います。

(編集・文責 山本 俊正)

「栗林輝夫先生を偲ぶ会」を九月二三日に開催

RCC主任研究員 舟木 讓

本研究センターの第二代センター長であり、また本研究センターが編集した『キリスト教平和学事典』発行(二〇〇九年)時のセンター長として尽力された栗林輝夫先生(本学法学部教授・宗教主事)は、

二〇一五年五月一四日、ご家族に見守られ、この世に於ける六七余年の生涯を力の限り走り終え、主のもとに召されました。生前の先生のお働きを次世代に伝えるため、また先生への感謝とご遺族の平

安を祈るため、本研究センター主催、また講義やキリスト教活動で協働した神学部ならびに宗教主事会が共催する形で、二〇一五年九月二三日、関西学院会館光の間を会場として、二部構成にて先生を偲ぶ会を開催いたしました。以下に先生のご生前に多くのご教示と交わりをいただいた者の一人として、栗林先生、出席してくださったご遺族・関係者の皆様ならびに本企画に快く協力してくださった皆様に心からの感謝をもって、簡単にその報告をさせていただきます。

「偲ぶ会」の第一部は、舟木讓 大学宗教主事の司式のもと太宰まり 関西学院オルガニストが奏楽を担当し、追悼の礼拝を献げました。礼拝の中では、栗林先生の愛唱賛美歌を歌い、愛唱聖句を聞き、田淵結 宗教総主事より、生前の工ピソードを交えたメッセージが語られました。また、法学部のチャペル・アワーにおいて奉仕を務めた音楽団体である、本学の「ハンドベルクワイア」

「聖歌隊」「ゴスペルクワイア」「Power of Voice」そして栗林先生ご自身が顧問として特に親しい交わりがあった「バロックアンサンブル」が感謝を込めて演奏を行いました。

第二部では、ご生前の業績を振り返り私たちが受け継ぐべき事を再確認することを目的に、現RCCセンター長である山本俊正 商学部教授・宗教主事がファシリテーターをつとめ、辻学氏(広島大学大学院総合科学研究科教授)、岩野祐介氏(本学神学部准教授)、大宮有博氏(名古屋学院大学商学部准教授)、西原廉太氏(立教学院副院長)の順で講話が行われました。

辻氏は元本学商学部教授・宗教主事として一九九七年より二〇〇七年まで、栗林先生とRCCの研究員としてまた宗教主事としての親交から個人的な思い出も含め、栗林神学の遺した足跡の大きさについて語ってくださいました。特に氏がスイス留学中の一九九一年に出版された『荊冠の神学』

に言及され、同著が北森嘉蔵氏の『神の痛みの神学』と並び唯一無比の日本の神学であるという高い評価を述べられました。またその後出版された『日本民話の神学』に対しても「中央ではなく地方、中心ではなく周縁、辺境の神学」という栗林神学の底流にあるものが変わらず存在しているとして、日本では希有な「日本の神学者」である栗林先生の本質を明らかにしてくださいました。

その本質は、その後先生が留学中に遭遇された「9・11」に始まるアメリカにおける宗教と政治の問題への考察、そして晩年体調の悪化を感じながらも最後まで取り組まれた「原子力発電」が有する根本問題への考察まで一貫しており、私たちに對して主体的に「被差別者の目、周縁者の目」をもって社会に對峙することを問いつけられた生涯であったことをあらためて想起させていただきますができました。

岩野氏は、本学の神学部教員として二〇〇八年に着任され

「聖歌隊」「ゴスペルクワイア」「Power of Voice」そして栗林先生ご自身が顧問として特に親しい交わりがあった「バロックアンサンブル」が感謝を込めて演奏を行いました。

第二部では、ご生前の業績を振り返り私たちが受け継ぐべき事を再確認することを目的に、現RCCセンター長である山本俊正 商学部教授・宗教主事がファシリテーターをつとめ、辻学氏(広島大学大学院総合科学研究科教授)、岩野祐介氏(本学神学部准教授)、大宮有博氏(名古屋学院大学商学部准教授)、西原廉太氏(立教学院副院長)の順で講話が行われました。

辻氏は元本学商学部教授・宗教主事として一九九七年より二〇〇七年まで、栗林先生とRCCの研究員としてまた宗教主事としての親交から個人的な思い出も含め、栗林神学の遺した足跡の大きさについて語ってくださいました。特に氏がスイス留学中の一九九一年に出版された『荊冠の神学』

に言及され、同著が北森嘉蔵氏の『神の痛みの神学』と並び唯一無比の日本の神学であるという高い評価を述べられました。またその後出版された『日本民話の神学』に対しても「中央ではなく地方、中心ではなく周縁、辺境の神学」という栗林神学の底流にあるものが変わらず存在しているとして、日本では希有な「日本の神学者」である栗林先生の本質を明らかにしてくださいました。

その本質は、その後先生が留学中に遭遇された「9・11」に始まるアメリカにおける宗教と政治の問題への考察、そして晩年体調の悪化を感じながらも最後まで取り組まれた「原子力発電」が有する根本問題への考察まで一貫しており、私たちに對して主体的に「被差別者の目、周縁者の目」をもって社会に對峙することを問いつけられた生涯であったことをあらためて想起させていただきますができました。

岩野氏は、本学の神学部教員として二〇〇八年に着任され

てから、栗林先生との親交が始まった方でありますが、京都大学の学生時代に出会った『荊冠の神学』の印象と栗林先生ご本人の印象が全く異なり、栗林先生が単なる「運動や主張のためではなく」「聖書を読んで、イエスの言葉を用いて、そこから導き出されたもの」ということを書いている方だという、まさに栗林先生の研究の方法論の本質に迫る表現を用いて紹介してくださいました。

また二〇〇八年に出された『原子爆弾とキリスト教―広島、長崎はしょうがないか』も取り上げられ、栗林先生が一貫して述べてこられたことの一つである「人間が人間を支配するような仕組みはおかしい」「人間は人間のいのちを大事にしなければならぬ」という主張を示してください、「教会の外にまで届く神学」を追求してこられたその足跡を明らかにしてくださいました。

大宮氏は先のお二人とは異なり、本学の神学部生時代から

教師としての栗林先生から影響を受けてきた方であり、その縁もあつて、二〇一五年度末で定年退職を迎えられるはずであつた栗林先生の後任として、法学部教員・宗教主事として就任される事が決まっている方であります。教師と学生という関係の中で、栗林先生より「神学」することの目的や方法を丁寧な繰り返し指導されたの思い出を語られました。また、大宮氏の留学に際してのアドバイスも受けられたこと、弟子のような存在であつたような印象をこの場に出席した一同が受けました。

そして、「弟子」の目で栗林先生の足跡を改めて整理された結果として、三つのステージを栗林先生が歩まれたとの理解の下、そのステージの紹介を以下のようになされました。

第一のステージは『荊冠の神学』から『民話の神学』にいたる期間で、「被抑圧者の証と体験談」等々に耳を傾け、そうした人々の経験を聖書と伝統と組み合わせる作業をさ

れた時期、第二のステージはパークレーでの在外研究期間中で、当時の神学を遮二無二吸収された時期、そして最後が「政治神学」のステージで「預言的であること」を目指して、原子爆弾やアメリカの抱える問題等々に積極的に接近された時期であると話され、そうした研究の果実を私たちが「現代に相応しい『聖書』翻訳や「知の統合」といった形で受け継ぐべきであるという提言をして話しを終わられました。

最後に話された西原氏は、氏が京都大学の学生時代に出会われた「京都のエキユメニカルなネットワーク『東九条キリスト者現場研修会』での経験から、そこでの活動の中で起こった『聖書』との出会い、またその後の「在日コリアン」「沖繩の問題」「被差別部落の問題」「アイヌの問題」「天皇制の問題」等々の「社会的問題」を教会の課題としてどのように理解するかに苦慮する中で、栗林先生の『荊冠の神学』に出会い、その後、結果として



聖公会の教職となり、研究と教育そして牧会者の道を歩まれた自分史と栗林神学の関係を語ってくださいました。また現在副院長として働いておられる立教大学にアメリカ聖公会から日本聖公会を通じて一九五〇年代に原子炉が送られたという事実をどのように受けとめ考えるかといった問題に対しても栗林先生が心碎かれ、このことをテーマにした共同研究に参加してくださいる予定であつたことも明らかにしてくださいました。

そしてこれまでの三氏も話された『荊冠の神学』に最後にもう一度言及され、この本の

最重要箇所は「あとがき」にあると指摘されました。「あとがき」には栗林先生ご自身の家族が実際に受けた差別が具体的に示され、そのことに向き合わずに大学教員という知的階層でとどまるなら「母や祖父らの声がアベルの血のように大地から吹き出で、石も叫び始めよう」と記されておられ、ここに栗林神学の原点と共に帰結があり、さらにそれを残された私たちが「誠実に引き継いでいきたい」と締めくくられました。

以上四氏によつて栗林先生が遺された果実の豊かさと同様性、そしてその根底にある問題意識を様々な角度から光を当ててください、栗林先生の存在が立体的に再構築され、遺された私たちが負うべき課題が様々に明らかにされたことに心からの感謝を申し上げます。また改めて栗林先生が天にあって、平安のうちに憩われ、地上でやり残された課題に生き生きと挑んでおられる事を信じたいと思います。

■研究プロジェクト報告

「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」

研究代表者 山本 俊正 商学部教授

本年度は在外の研究者及び本プロジェクト研究員による個別研究発表を中心に研究会を進めた。第一回研究会は、六月二六日(金)に、黄 尚翼(ソウル大学医科大学教授)を講師に招き、研究会を開催した。テーマは「東アジアの平和と朝鮮半島の保健医療の視点から」であった。黄氏は臨床医師であると同時に、日本統治下に



おける朝鮮半島の医療、健康の状況に関する研究者であり、豊富な資料、データを基に研究発表が行われた。第二回研究会は、七月六日に、ジェフリー・メンセンデイーク研究員(神学部准教授・宗教センター宗教主事)が「東アジアにおける歴史的トラウマの問題」をテーマに発表を行った。

米国、イースタン・メノナイト大学で研究されている、世界各地でのトラウマを経験した人々への取り組みが紹介され、東アジアにおける暴力の連鎖を断ち切る取り組みの必要性が指摘された。第三回研究会は、一〇月二日(金)に、山本俊正センター長(商学部教授、宗教主事)が「東アジアの平和と憲法九条・キリスト教非暴力思想の可能性」を主題に研究発表を行った。東アジアの平和構築プロセスに

おける、日本の平和憲法の意義、特に九条の持つ可能性が強調された。また、キリスト教の非暴力主義の伝統、歴史的な変遷、現在の取り組みなどに言及された。第四回研究会は、十一月二五日(水)に、水戸考道研究員(法学部教授)が研究発表を行った。主題は「日本の軍事力、平和力、市民力と東アジアにおける平和構築・靖国参拝と憲法九条改正を中心に」であった。多様化する現代の国際情勢、国際政治の現実に基づき、日本の軍事力、平和力、市民力の分析が紹介された。また、東アジアの平和構築に関連して、靖国参拝と憲法九条を事例として、具体的な提案がなされた。

なお、本プロジェクトの研究主題に合わせて、RCC主催講演会が、十一月一七日(火)に、関学会館光の間を会場にして開催された。講師は李鍾元氏(早稲田大学大学院教授)で、主題は「東アジアの平和―『安保法制』以降の日・中・韓関係の課題と展望」であった。(講演要約概要は、本誌記事を参照)

■研究プロジェクト報告

「日本における礼拝のインカルチュレーション」

研究代表者 中道 基夫 神学部教授

宣教とは福音と文化とのコミュニケーションであり、欧米から日本に伝えられたキリスト教は日本文化に福音を伝えようとすると、日本文化の影響を受けると共に、また日本文化にも影響を与えるものとなる。この様な宣教の動きを宣教論的に積極的に評価しようとするのが「インカルチュレーション(文化内開花)」である。

本研究プロジェクトは、礼拝を一つのインカルチュレーションの場として、礼拝で使われる言葉や音楽に注目して研究を進めるものである。本研究の目的は、従来欧米中心主義が支配的であったキリスト教理解から解放され、日本文化とキリスト教との出会いを批判的かつ積極的に評価し、新たなキリスト教の可能性の道を開いていこうとするものである。

第一回目である二〇一五年度は、インカルチュレーションについての基本的理解を深め、それぞれの専門分野におけるキリスト教のインカルチュレーションに関連するテーマについて紹介しあうことを目標として進めてきた。



第一回目は、本研究のガイダンスとして中道基夫（神学部教授）によって「礼拝のインカルチュレーションについて」と題して概論的な発題がなされた。相互の共通理解を深めると共に、各研究員の関心や専門領域との関係について意見を交わした。

第二回目の研究会は、山泰幸（人間福祉学部教授）によって「弔辞例文に見る死者の語られ方」と題して、キリスト教の用語である死者の居場所としての「天国」がいつ頃から弔辞例文に登場するかについての研究が紹介された。

第三回の研究会では、桐藤薫（神学部・文学部非常勤講師）によって、「神概念のインカルチュレーション―漢訳聖書翻訳史の視点から―」と題して、宣教師たちがキリスト教の神概念を漢語圏に伝えようとしたのかについての研究発表がなされた。

二〇一六年一月には第四回として賛美歌におけるインカルチュレーションというテーマで水野隆一（神学部教授）によって研究会がもたれた。



RCCキリスト教講座実施報告

「共観福音書入門」テーマに 参加者の熱心さに、自分の原点思い出す

東 よしみ 神学部助教

二〇一四年春学期、月一回のRCCキリスト教講座を担当し、「共観福音書入門」というタイトルで、計四回の講義を行いました。それぞれの講義

義は、「共観福音書問題」とは？から始まり、マルコ福音書入門、マタイ福音書入門、ルカ福音書入門という内容でした。受講者は、近隣の方々を中心に、卒業生、卒業生・在学生の親、教会関係者、関学を退職された先生方と実に多様な顔ぶれでした。朝日新聞の文化欄で紹介されたこともあり、

毎回四〇人前後の参加者がありました。また、わたしが所属する関西学院教会から多くの会員が参加してくれたことも嬉しいことでした。

第一回目の講座から、受講者の熱心さと質問の鋭さがとても印象的でした。初學者でも分かるように、分かりやすい説明を心がけ、入門の内容を中心に取り扱いましたが、専門家の方々のためにも発展的な内容をも織り交ぜました。九〇分という短い時間の中に、各福音書の緒論的な内容から発展的な内容までをカバーすることは難しかったです。レジュメと配布資料を駆使して工夫をしました。また、各講義を基本的には独立したものにし、その講義だけに参加しても理解できるようにしました。非常に熱心に受講してくだ

さる受講者を前にすると、わたし自身もとても楽しく講義をすることができました。鋭い質問やコメントには、毎回、多くのことを学びました。受講者の中には高齢の方も多くいらっしやいましたが、学生時代のような若々しい気持ちになり楽しい、というコメントがありました。わたしよりもずっと年上の方々、楽しんでるうちに勉強してくださる姿は、大きな励ましと喜びを与えてくれるものでした。わたし自身も、学ぶ喜び、教える喜びを、改めて教えてもらい、自分の原点を思い出すことができました。

また、キリスト教徒の受講者も半数以上を占めたように思います。聖書をより深く読むことができるようになった、新しい見方ができるようになった、もっと聖書を読みたくなかった、というコメントなどがあり、嬉しく思いました。

受講者の中から希望の声があり、最終回の講義後、学院会館のポプラで食事会の時を持ちました。当日声をかけ

たにもかかわらず、総勢二〇人ほどの受講者が参加してくださり、楽しい交わりの時を持ちました。そこで初めて、どのような興味、関心をもって、どのような経緯でこの講座に参加したのか、個人的なお話を聞くことができました。改めて、様々な経緯から同じ場所に集まり、一時、学ぶという時間を共有していたのだな、ということを知り、感動の念を覚えました。この食事会の開催のために奔走してくださった受講者の方と事務局の古結さんに感謝します。

わたしも無事に退職をした暁には、このような講座に出て、いつまでも学ぶ喜びを忘れたくないものです。ですが、その前に、あと数回は講師としてこの講座を担当したいと今から次回を楽しみにしています。

編集後記



RCCキリスト教講座は広く好評を得ており、関学の重要な社会貢献活動となりつつあるのは喜ばしい限りです(M)。